一冊の先に開かれた、新たな地平

Cradle

出羽庄内地域文化情報誌［クレードル］

冬号
vol.89
2026 Winter

特集

今よむ、丸谷才一

ご自由に
お持ちください
TAKE FREE

Cradle｜冬号
出羽庄内地域文化情報誌［クレードル］
令和8年1月1日発行
2026 Winter vol.89

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888
制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／月山

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

左内への手紙
［7通目］

鶴岡の先祖

西洋史学者
勝田 俊輔

「薩州屋敷焼撃之図」（致道博物館蔵）

自分の母方のさらに母方の先祖が鶴岡の出であることは、子どもの時から聞かされていました。また少し長じてからは、先祖の一人が戊辰戦争（の引き金ともなった事件）で戦死していたことも教えられました。しかし私は先祖不幸者であり、鶴岡を初めて訪れたのはようやく一昨年（２０２４）に東大人文・鶴岡セミナーに参加した時のことでした。このセミナーで講演するにあたり、先祖について遅ればせながら調べたことで、戦死したのがどのような人物だったのか、おぼろげにわかってきました。

新暦１８６８年1月19日に、江戸の薩摩藩屋敷を庄内藩を主力とする幕府軍が攻撃し、その際に庄内藩では戦死者が一人出ました。これが私の先祖である中世古仲蔵です。庄内藩・松山藩の記録では「砲車司令」と書かれていますので大砲隊を指揮していたようですが、敵方の銃弾があたって命を落としたとのことです。仲蔵は当時24歳でしたが、すでに幼子がおり、また恩賞によりこの子が藩から禄をもらったこともあって、一家が途絶えることはありませんでした。

『新編 庄内人名辞典』によると、仲蔵は剣術で免許皆伝の腕前であり、藩主の世継ぎの指南役を拝命していたようですので、武に優れた人物だったように見えます。また、その養父の甚四郎は鶴岡町奉行や致道館の学監を務めたとのことで、こちらは文に秀でていたように思われます。養父とはいえ、一族に見せてもらった家系図によれば、甚四郎の長女が仲蔵と結婚していますので、仲蔵の遺児には（従って私にも）、甚四郎の血も流れていたことになります。

とはいえ、仲蔵は私の母の母の父の父の父であり、5代前の人です。計算すると、私は32分の1しかこの人の血を継いでいないことになります。甚四郎から数えると64分の1のみです。この例に限らず一般に、先祖自慢をするのはどう考えてもナンセンスです。

その一方で、中年の終わりにさしかかる年齢を迎えて、先祖のことが気になるようになってきました。父方の先祖や、母の父方の先祖も調べてみたのですが、せいぜい4代前までしかたどれず（つまり士族ではなかった、ということです）、15代前まで確認できる中世古の家系と比べ、残念ながらわからないことが少なからずあります。

さて、仲蔵の孫の一人は、上海の東亜同文書院で学び、貿易の仕事に就いたようです。その息子は陸軍に入り、飛行機の整備士として大戦中は台湾に配属されていました。明治以降の日本の歴史の流れに乗って、子孫たちは東アジアに渡ったわけですが、慶応年間に若くして生涯を終えた仲蔵がそのことを知ったら、何を思ったでしょうか。

かつた・しゅんすけ ｜ 西洋史学者

1967年東京生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科教授。博士（文学）。専門分野は近代イギリス・アイルランド史。主要著作に『真夜中の立法者キャプテン・ロック―― 19世紀アイルランド農村の反乱と支配』（山川出版社 2009年11月）、『アイルランド大飢饉――ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』（刀水書房 2016年2月）、*Rockites, Magistrates and Parliamentarians: Governance and Disturbances in Pre-Famine Rural Munster*（Routledge, August 2017）、『東京大学が文京区になかったら――「文化のまち」はいかに生まれたか』（NTT出版 2018年1月）がある。

特集

今よむ、丸谷才一

小説家であり、評論家であり、翻訳家であり、随筆家であり、英文学者。
鶴岡市出身の作家、丸谷才一は、多岐にわたる文筆活動で
戦後の日本文学に新たな道を拓いたといわれています。
2025年に生誕100年を迎え、鶴岡市にて顕彰事業が行われた今、
あらためて郷里から、その文学と人の一端をたどってみます。

丸谷才一『横しぐれ』講談社、丸谷才一『たった一人の反乱』講談社文芸文庫、丸谷才一『女ざかり』文藝春秋、丸谷才一『笹まくら』河出書房新社、丸谷才一『輝く日の宮』講談社、丸谷才一『エホバの顔を避けて』河出書房新社

参考=「追悼総特集 丸谷才一 古典と外文と作家・批評家」河出書房新社 夢ムック ほか
トビラ撮影協力=鶴岡市立図書館

特集
今よむ、丸谷才一

鶴岡出身の文学者、丸谷才一の原点を探る。

2025年夏に鶴岡市立図書館で開催され、小説家の松家仁之（まついえまさし）氏に「『丸谷愛』が隅々までにじみ出ていた（※）」と評された「生誕100年記念 丸谷才一展」。そこから見えてきた丸谷才一像について、展示を担当した今野章さんにお話を伺いました。

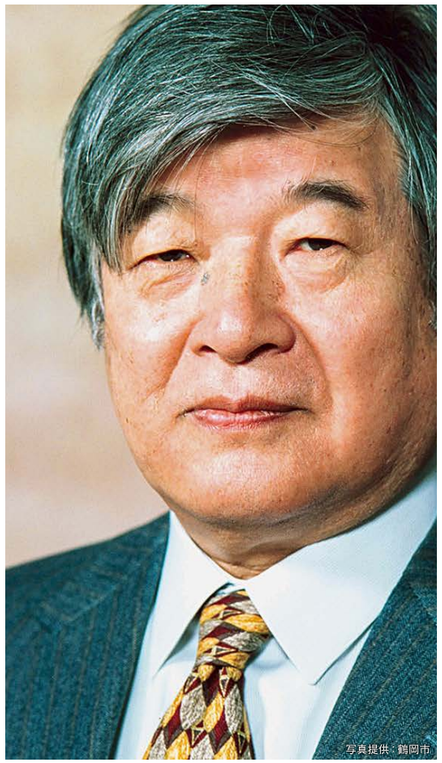
「丸谷さんが17歳まで暮らしていた鶴岡は、士族色が強く残る旧態依然のまちでした。加えて5年間の鶴岡中学校時代は戦時下という軍国主義の世の中。学校文集など地元資料に残された丸谷さんの文章を見ると、戦争に対する冷やかな目や権威に対する批判性が感じられ、この頃からすでに〝丸谷才一〟だと思いましたね」。

1925年に医者の次男として生まれ、たくさんの本を読んで過ごした少年時代。時代や風土の閉塞感を抱きながらも、10歳上の従兄弟である画家の山本甚作氏に憧れ、泳ぎや将棋、絵の書き方などさまざまなことを教わりながら成長しました。中でも「人間として一番立派な生き方は藝術にたづさはること」という山本氏の信念に多大な影響を受け、小学5年生で小説家になると決意。旧制鶴岡中学校、旧制新潟高等学校を経て東京大学文学部英文科で英文学を学び、翻訳を刊行したことについても、「まづ大学の文学部にはいつて外国文学をやれ、翻訳をやつて本場の小説の書き方を勉強せよ、次に自分の小説を書け」という氏の導きがあったからと述懐しています（荘内日報1996年11月10日付「寄稿 山本甚作画伯を偲んで」）。

こうして1960年、『エホバの顔を避けて』で小説家デビュー。以後、芥川賞や谷崎潤一郎賞など数々の賞を受賞し、評論や随筆、対談集、歴史的仮名遣いを用いた長編小説など、2012年に亡くなるまで数え切れないほどの著書を世に送り出しました。「丸谷さんは同じ鶴岡出身の藤沢周平と違ってそれほど鶴岡について書いていません。その点も含め地元では、『鶴岡が嫌いなのでは』と言われていましたが、墓碑にもわざわざ『出羽鶴岡の人』と銘じていますし、決してそんなことはなかったと思います」と今野さん。

その理由は、丸谷さんが文化勲章を受章した2011年に母校の朝暘第一小学校図書委員長からもらった手紙へのお礼状にもあります。そこでは数あるお祝いの手紙の中で「わたしを一番しあわせにしてくれたのが君の手紙でした」と嬉しさを表しています。1988年の荘内日報「鶴岡南高等学校創立百周年特集号」の寄稿では、浪人して旧制高校の文系を目指していた時に、理系進学を熱心に勧めていた旧制鶴岡中学の校長から、生徒集会で名指しで批判された体験を持ち出し、「自分が進みたい方角があるなれば、校長が何と言はうと、父兄が何を言はうと、そんなものは無視して自分の志望を貫け」と母校の後輩たちに叱咤激励しています。

丸谷才一展が終わって数カ月。今野さんは今回改めてさまざまな郷土資料や著書を調べたことで、丸谷さんと郷里の新たなつながりを発見できたと話します。「表立っては言わないけれど、郷里のことを静かに想う。そういう丸谷さんの新たな一面を地元の皆さんに紹介できて嬉しいです」。


写真提供：鶴岡市

1925（大正14）年、鶴岡市馬場町の丸谷医院に生まれる。朝暘第一小学校、旧制鶴岡中学校を卒業。東京の城北予備校を経て1944年、旧制新潟高等学校に入学、召集。終戦後に復学し、1947年に東京大学文学部英文科に入学。1952年、初の翻訳本を刊行。1953年、國學院大學の専任講師となる（のち助教授）。1960年、処女作『エホバの顔を避けて』を刊行。以降、数多くの文学賞を受賞。『笹まくら』（河出文化賞）、『年の残り』（芥川賞）、『たった一人の反乱』（谷崎潤一郎賞）、『忠臣蔵とは何か』（野間文芸賞）、『輝く日の宮』（泉鏡花文学賞）。1978年からは芥川賞などの文学賞選考委員を務め、後進の育成にも尽力する。2011年、文化勲章受章。2012年、逝去。享年87歳。

※日本経済新聞2025年10月26日号より

写真提供：白甕社

丸谷さんは旧制鶴岡中学校で美術部に入部し、地元美術団体「白甕社（はくおうしゃ）」にも毎年作品を出品していた。2列目左から3番目が丸谷さん、5番目が従兄弟の山本甚作さん。（1943年）

今野章さんは、丸谷才一展の企画立案から構成まで展示のキュレーションを担当。鶴岡市郷土資料館館長補佐。

2025年7月29日から9月28日まで鶴岡市立図書館2階の郷土資料館で開催された「生誕100年記念　丸谷才一展」。郷里鶴岡との関わりに注目した展示構成が話題を呼んだ。下の写真は若き日の丸谷さんの文章が掲載されている旧制鶴岡中学校の学校文集。

文芸の真髄を追求する鶴岡的な伝統を継ぐ文豪

郷里での「丸谷才一展」では、直木賞作家である佐藤賢一さんの丸谷さん追悼文「鶴岡は先生を待っていますよ」(※)も紹介され、地元では知られていなかったお二人の交流について知ることができました。同郷の作家から見た丸谷才一とは、どのような作家だったのでしょう。

丸谷才一『たった一人の反乱』(講談社 1972)
現代的な都会の風俗を背景に、市民社会と個人の関係を知的ユーモアたっぷりに描いた現代小説。第8回谷崎潤一郎賞受賞。

※『すばる』2012年12月号特集「追悼 丸谷才一」掲載

丸谷さんの小説を初めて読んだのは、国内外に関わらずさまざまな作家の本を乱読していた学生の時です。それまで読んだ日本の小説は、自分のルサンチマンを赤裸々に描くような私小説風のものが多かったので、それとはまったく違う、非常に知的で明快で、物語として見事な仕上がりの小説が日本にあるんだと驚きました。

間接的に丸谷さんと接点を持つようになったのは、僕が『王妃の離婚』で直木賞を受賞した翌日あたりからです。毎日新聞の記者から「丸谷先生からのご紹介で」と宿泊先に仕事依頼の連絡があったのです。地元誌が丸谷さんに僕の受賞について取材した時は「作品を読んでいないから何も言えない」と答えられたそうですが、同郷の後輩を気にして新聞社に話してくれたのだと思います。初めてお会いしたのはパーティーの席で、その時は何を話したかわからないくらい緊張しました。何せ丸谷さんは文壇に1つのグループがあるほどの大文豪で、その影響力たるやものすごかったからです。

その後も新刊をお送りすると電話がかかってきて、感想を聞かせてくれたり、書評を書いてくれたりとずっとお世話になってきました。丸谷さんは鶴岡のことをあまり書いていませんが、電話では必ず「鶴岡はどうですか」とお聞きになるので、意外と愛着をお持ちなんだなと感じていました。丸谷さんが鶴岡に住んでいた時代は、日本が一番暗かった時です。丸谷さんに限らず、その時代に青春時代を過ごされた方々は鬱屈としたものを抱えていて、それを戦後に一気に解放したんです。丸谷さんの小説の明るさも同じで、遠慮せずに自分の知的好奇心を追求していいんだ、という晴れやかさがとても文章に出ていると思います。

驚くのは丸谷さんの専門分野の広さです。どのような作家もたまに寄り道することはあっても、大抵は自分の得意分野に生きます。でも丸谷さんは小説家であると同時に英文学者で、途中から日本古典文学の大家にもなって、すべてに非常に造詣の深いものを残している。このような人はなかなかいません。僕が思うに、丸谷さんが英文学とその対極にある和歌や短歌の両方を追求したのは、文芸というものの真髄を追っていたからではないかと思います。そう考えると丸谷さんの気持ちがわかる気がするし、それは「本当にいいものを読んだ」という読後感にすごくつながっていると思いますね。

もう一つ丸谷さんの仕事を見て思うのは、すごく鶴岡的な伝統を継いでいる人だということです。というのも僕が小説家として出版の世界に入った時、鶴岡は丸谷さんと藤沢周平さんの出身地として一目置かれていました。そのことに驚き、僕も地元の歴史や文化に向き合うようになったところ、知性を磨くことをプライドとし、生の言葉で相手を傷つけるのをあまり好まないという鶴岡の人物像が見えてきました。じゃあどのように伝えるか。丸谷さんはその方法を英文学、つまりイギリス的ユーモアに見出しました。だから丸谷さんのユーモアは知性そのものです。そのことをご自身がどう考えていたかはわかりませんが、晩年は鶴岡に戻りたいという思いがあった。電話で話す限り、そう感じるところが強くありましたね。(談)

佐藤賢一さん

新潮社©

1968(昭和43)年、山形県鶴岡市生まれ。丸谷さんと同じ朝暘第一小学校、県立鶴岡南高等学校(旧制鶴岡中学校)卒業。東北大学大学院でフランス中世史を専攻。1993年に『ジャガーになった男』で小説すばる新人賞、1999年に『王妃の離婚』で直木賞を受賞。ヨーロッパから日本まで史実をもとにした歴史小説が高く評価され、数々の賞を受賞。2026年夏、『小説 ヒトラー』全3巻(集英社)が発売予定。

佐藤賢一『王妃の離婚』(集英社)
15世紀末のフランスを舞台に、王妃と王ルイ12世の離婚裁判をめぐる物語。この作品で第121回直木賞を受賞したことを機に丸谷さんとの交流が始まった。

日本文学の最後の峰 丸谷才一という文人

「大きな、計り知れないほど大きな薫陶を丸谷さんから受けた」2013年、辻原登さんがクレードルの巻頭に寄稿してくださった一文です。生前の丸谷さんとの縁が深く『丸谷才一全集』（文藝春秋）の編纂者の一人でもある辻原さんは丸谷さんを「最後の文人」と称し、一生涯のライバルだと語ります。

出会いは、僕が1990年に芥川賞をもらった時、丸谷さんが選考委員で、「リアリズムを突き抜けた新しい作家が日本文学に登場した」といった、最高にうれしい言葉をいただきました。それ以来のお付き合いで、僕が小説を発表すると「君、こんなものを書いてちゃだめだ」とだけ書かれた速達はがきが届くんです。丸谷さんはすごく怖い人でね。その怖さっていうのは厳しさ、若い作家たちの良さを引っ張り出してやろうっていう、厳しくて愛情深い先生みたいなところがありましたから、褒めてもらいたくて丸谷さんが喜んでくれるような小説を必死になって書こう書こうとしてきました。だから、僕にとって丸谷さんは今も昔もライバルですよ。あんなにすごいものを書いた作家をライバルとすることで、自分を励まし引き上げることになると思っていました。

丸谷さんがよく言っておられたのが、小説というのは楽しくなければいけないと。ゴシップ集なんだと。パスティーシュやパロディ（模倣、諷刺）の技法もよく使われている。「これはあの作品のここをうまく真似てるな」とか、いい小説はそういう読み方ができるんですよね。そういう面白がり方、楽しみ方を教えてくれるのが丸谷さんの小説であり批評でありエッセイ。ウイットやユーモアを非常に大切にされていましたが、丸谷さんの人間性とその作品がエスプリそのもので、それはイギリス文学を研究した丸谷さんの真骨頂の一つだと思います。また一方で、優れた学者でもある。現代のさまざまなものに興味関心を広げている水平軸と、古典や歴史への造詣、幅広い教養といった縦軸が交差するところに丸谷文学があるというか。だから丸谷さんの小説というのは、高級な遊びのようで、それにはある程度の読む力を要するんですが、丸谷さんの小説を読みながら楽しみ方が身についてくるという仕掛けのある作品、文学なんです。

文学というのは丸谷さんにとって常に「現在」で、進歩も退化もないものという考え方だったと思います。古典ギリシャの悲劇よりもシェイクスピアが進んでいるなんてことはない。セルバンテスが書いたドン・キホーテよりも、我々の小説が進化・進歩しているなんてことはない。時間と空間を一度はずして文学作品そのものに向き合ってみると、その時代に生み出されたものを、いつの時代でも読んで楽しめるという同時代性、「現在」性です。

日本文学という稀有壮大な山脈は、万葉集に始まって、源氏物語、江戸になれば近松、西鶴、明治にはその山並みにヨーロッパの文学が接続して、シェイクスピアやバルザックといった作家たちとつながるように、鷗外、漱石、谷崎らといった近代文学が生まれた。その輝かしい日本文学の山脈が、丸谷さんで終わったとも僕は考えています。丸谷さんに限らず、昔は文学の大きさがあった。日本文学もヨーロッパ文学も徹底して研究して作品を生んだ丸谷さんの仕事はまさに壮大で、芸術を味わう感動を覚える。日本文学の最後の山峰、その意味では最後の文人といえると思うんです。（談）

丸谷才一『笹まくら』（新潮文庫）
徴兵忌避の過去を持つ浜田庄吉のもとに届いたかつての恋人の訃報。現代と過去が交錯しながら、人々の戦後の人生を描いた長編小説。短編～中編にも好きな作品が多いという辻原さんが一番に挙げた『笹まくら』は第2回河出文化賞を受賞。

辻原 登さん

撮影：森 清

1945（昭和20）年、和歌山県生まれ。90年に『村の名前』で芥川賞、99年『翔べ麒麟』で読売文学賞、2000年『遊動亭円木』で谷崎潤一郎賞ほか受賞歴多数。前者2つの賞は丸谷さんが選考委員を務めていた。2012年、紫綬褒章を受章。芸術院会員。2013年、池澤夏樹、湯川豊、三浦雅士（敬称略）らと『丸谷才一全集』全12巻（文藝春秋）の編纂委員を務める。丸谷さんとは先達と後進のような間柄で、酒席も共にした仲。弊誌2013年5月号巻頭「庄内憧憬」には「私と鶴岡を結び付けたきっかけは丸谷才一という偉大な文学者との出会いだった」と寄稿している。

辻原 登『翔べ麒麟（上）』KADOKAWA／角川文庫
辻原 登『翔べ麒麟（下）』KADOKAWA／角川文庫
大唐帝国の高官、阿倍仲麻呂と、遣唐使の護衛となった藤原真幸。戦乱と陰謀、友情と恋、2人の運命が帝国を動かす歴史活劇。第50回読売文学賞を受賞。当時、丸谷さんが選考委員を務めていた。

特集
今よむ、
丸谷才一

私の好きな丸谷才一

**丸谷さんは文学という領域を豊かにするように
さまざまな作品を遺しました。時に教え諭すように、時に
ユーモラスに語らうような、丸谷さんの文学とその人。
私たちを新鮮な出会いや心動かす言葉の世界へと連れ出してくれます。**

丸谷作品を読むということ

東山 昭子 郷土文学研究家

自宅の書架から丸谷才一氏の著書を抜き出し広げてみた。丸谷文学最高のファンであり敬愛してやまない姪の落合良氏から贈られた著作の数々である。手から手に、心を込めて贈られた本の持つ独特の世界観がある。

小説分野では、やはり『女ざかり』と『輝く日の宮』を推奨する。パズルのように人と時と事がパーツごとに煌めいて、最後まで読まないと全体像はつかめない。該博な知識とユーモアに満ちた軽やかな機知。主人公の南弓子や杉安佐子の仕事と恋は、今を戦い抜く知的女性の厳しさとぬくもりを共存させた、巨大な作家の総体を感じさせる。結末までを集中して読み込まなければ、作者が俯瞰する世界にたどり着けない。それゆえ深い悦びが味わえる。

丸谷才一『輝く日の宮』講談社

言葉の使い手

椎名 和子 元高校教師

平安朝ガイドをしている私が一番お薦めする丸谷作品は、『輝く日の宮』です。表面的には現代小説に見えますが、作者の平安朝に関する深く幅広い蘊蓄（うんちく）が、国文学者であるヒロインの口を借りて語られています。

曰く、「輝く日の宮」の巻は道長によって削除させられた。曰く、道長と紫式部は性的パートナーでもあった等々。そういえば、丸谷さんが国語学者の大野晋氏と男同士で語り合ったハイレベル対談『光る源氏の物語』では「実事（じつじ）あり」と表現されていましたが、小説のヒロインには「性的パートナー」と言わせているのはさすがです。丸谷さんの旧仮名遣いへのこだわりは有名ですが、言葉に対する細かい気配りには、体内を流れている庄内弁の影響があるのかもしれません。

―新しい文学との出会いを―
丸谷才一文庫

鶴岡市立図書館の本館では小説、エッセイ、書評、対談集などのほか、姪の落合良さんが寄贈した丸谷作品の外国語版まで多数所蔵。書棚に見当たらない本も閉架書庫で管理され、一部を除いて貸し出し可。ぜひお問い合わせを。

鶴岡市家中新町14-7　tel.0235-25-2525

挨拶を贈る

茂木 薫 ぶっくすプロ ほんの森 代表

彼の交遊録ともいえる挨拶の本が３冊ほど傍らにある。ページを開くと、その会場に来た人たちや、一番前に陣取って耳を傾ける人を思い描いて、彼らとともに心が和んでくる。

［歴代の担当編集者を招く会での挨拶］に「文学作品を書くことは（中略）海流瓶のやうなものだといふことを悟り」とある。趣向を凝らして書いた作品が、海流を漂う瓶のように未来の作家たちに届き、彼らが刺激を受け、この挨拶の表題である「未来の文学を創る」と。この挨拶はこう締めくくられる。「もうしばらく、赤ワインかそれとも化粧水の瓶のなかにたよりを入れて流す仕事をつづけようと思ってゐます。その、むなしいと言へばむなしい、しかしひょつとすると意義があるかもしれない作業に、あと数年、御協力をお願ひします」（『別れの挨拶』）。生業とした文筆家としての姿勢が、爽やかな伝言として深く刻まれる一文のように思えた。

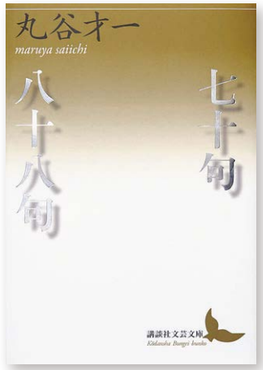
丸谷才一『別れの挨拶』集英社文庫

玩亭の発句

佐藤 照子 庄内総合高校非常勤講師

『八十八句』は、『七十句』に続く第二句集（遺句集）である。宗田安正氏の編集付記には「晩年の丸谷さんのうちに占める俳諧の重さ」とある。合わせて岩波新書の『歌仙の愉しみ』を読むと、歌仙は1960年代から熱中していたようだ。丸谷氏は信宗匠（大岡信）と乙三（岡野弘彦）との歌仙を心から楽しみ実にのびのびとしている。川上弘美氏が丸谷氏と連句をしたことを「丸谷才一先生 生誕100年記念講演会」で語っていたように、玩亭の発句は人間味にあふれている。

句集にはおいしそうな句が並び、巻頭と巻末の二句は新古今集への傾倒も感じられる。



丸谷才一『七十句／八十八句』講談社文芸文庫

それぞれにふくれ癖あり年の餅
焦げ目まで褒められてゐる雑煮かな
雪月花のときに思へやいろは歌
新古今八百年まつる寝正月

※玩亭は丸谷才一の俳号